

(1) 基本的に

少陽の病は、体の横・側面に主な症状が出る病で、ツボが深く、変わりにくく、再発が多い。軽くても治りにくい病は、少陽位にツボが出る。

代表例は、先ず、体の横側面に関係のある病、脇痛、偏頭痛・耳鳴り・眩暈などで、古典にもある。

「少陽之為病、口苦、咽乾、目眩也」

次に、経過が長く、軽くても治りにくい病で、喘息、アトピー、花粉症などのアレルギー疾患。肩凝り、腰痛、瘀血証などの経過の長いもの。

良くなる過程で昔の症状が復活することも多い。典型例は、アトピーと喘息の複合症状で、治療の過程で咳と皮膚炎が繰り返しながら軽くなっていく。

患者さんに時間が掛かることも伝える。

また、ツボの出ている側面が体の上下で左右入れ替わることも多い。全身ほぼ右が凝っていて、左耳の直下だけ左が凝り、左耳の耳鳴りの人がいた。歯科の仕事中的特有の姿勢に由来するのだろう。

(2) ツボが出やすい所

先ずは、手足の少陽経。手甲の3-4間、4-5間(中渚)と、外関など。灸では、中指・薬指の拳先、骨空、指端も使う。足徹腹、風市、外丘～飛揚、足甲3-4間、足臨泣など。

次は、体の横側面。頸では、横頸中央。背では、肩貞、痞根・徹腹、環跳。腹では、横腹、章門、五枢・維道、居髎。

また、少陽経と表裏の手足厥陰に出ることもあり、内関、上曲沢、陰包、蠡溝など。

経過が長いので、古い病でツボが出る体の境目にも多くなる。左右境界では、背の肩甲間部華佗経、胸の膻中、腹の臍周りの左右上盲兪。上下境界では、背の膈兪・督兪、腹の心下部や章門。体と手足の境目では、肩貞、居髎、足徹腹。

その他に症状によってツボが出る。耳では、耳の周りの翳風・完骨・風池、内耳の水毒が関係するときは足太陰など。花粉症は、上衝もあるので合谷、鼻水に上星、鼻の後ろの玉枕など。喘息では、肩甲間部華佗経、膻中など。

(3) 手順

経過が長いので慢性期や応急的予防処置が多い。

① 慢性期

ツボを考慮して慢性期の型の順で刺鍼。必要に応じて灸・灸頭鍼をして手の指端の灸で後始末。喘息で、肩甲間部華佗経に溝状の窪みがあれば、灸頭鍼。

灸や灸頭鍼と置鍼を中心とするときは、先ず、手の中指か薬指の骨空に灸。その後に、横向きかうつ伏せで、頭から足に施術。次に、仰向け上から下に施術。手指端の灸で後始末。花粉症では、鼻関連の顔や頭のツボに置鍼すると鼻水対策になる。

② 応急的予防処置

横向きに寝てもらい施術。左右入れ替わりのあるときは途中で寝方を変えてもらう。手の甲・内関に引き鍼した後に、頭から足に上から下に

(2)のツボを刺鍼するのが基本手順。中央部は痞根→章門→腰徹腹の順(陽→陰→陽)。足の陰経にツボが出ていれば刺鍼。最後に、頭を散鍼し手甲に引いて後始末。

陰経や腹の刺鍼は、状況を見ながら慎重に。

症状によって、症状ごとのツボを加える。

耳鳴り難聴で、耳の周りに熱のあるときは、散鍼。

③ 子供の喘息

子供の喘息には、肩甲間部や命門～横腹の小児鍼と、背骨揺すりやクスグリが効果的。

要点

- ① 少陽の病は、横、ツボが深く、変わりにくい
- ② 経過が長く、治っても再発することが多い
- ③ 体の横のツボは途中で左右入れ替わることも